

■ 書 評



「うつ』の構造

神庭重信・内海 健 編
弘文堂 2011年12月
232頁, 定価 3,360円

WHOは2008年に、寿命、健康喪失の大きさ(DALY値)を尺度に世界69億を超える人の病気に関する統計報告(2004年時)を発表した。それによると、呼吸器感染症、消化器感染症に次いで、なんとうつ病が第3位を占めるに至っている。日本についてDALY値をみると、うつ病が第1位で、認知症、統合失調症、双極性障害、自傷などトップ10のうち5つを精神障害関連の疾病が占めている。

こうした疫学知見は、グローバル化の現代、先進国だけでなく途上国においても事例化する精神障害が増え、大きな社会的問題をもたらしていることを示唆するものである。同時にこれは、精神疾患の発症に、遺伝子だけでなく社会・文化の影響も無視できないこと、したがって、精神障害の病態理解、また治療、あるいは予防において、生物学的アプローチとともに、広義の精神病理学的アプローチが要請されていることを支持する知見とみることができる。

その意味では、本書『「うつ』の構造』は、現代日本におけるうつ病について双方のアプローチから光をあてた、まことに時宜を得た研究書である。この方面で活躍する論客による8編の論文がおさめられている。いくつかの論文について評者の興味のおもむくままに、覚え書き風にごくかいつまんで紹介したい。生物学的アプローチからの論考では、黒木俊秀氏が「うつ病の神経生物学の潮流」において、うつ病と正常な悲哀は連続しているのか、断裂があるのかという問題枠のもとに、機能的画像研究を含む現在の生物学的研究の視点からすると、「正常な悲哀

から極めて重篤な精神病像を伴ううつ病までを一つの連続体(スペクトラム)としてみなして解析するほうが真実に接近するのではないか」という論点を提出する。また神庭重信氏は、「文化一脳・高次精神の共同構成とうつ病の形相」において、「文化一脳・高次精神の共同構成」という認識のもとに、モラトリアムが延長する現代社会におけるディスチミア親和型の出現に代表される「精神疾患の表現型が時代とともにその姿を変える」現象を理解する視点を提出し、あわせて、うつ状態は「意識の産物ではなく、生得的な文化認知に随伴する前意識での選択に他ならない」という考え方を述べる。この2つの論考は、今後の生物学的精神医学が展開していく際の方法論を描いており、刺激的である。渡邊衛一郎氏は「薬物療法の観点からみたうつ病」で、今後のうつ病治療で求められる点に関し、「初診でうつ状態の診断に迷った場合、ベンゾジアゼピン系抗不安薬単独または鎮静系の抗うつ薬少量を投与する」という指針を提示している。この指摘は、SSRIを安易に第1選択薬として使用するという風潮に警鐘を鳴らすものといえる。

精神病理学のアプローチの論考では、内海健氏は『「うつ』の構造変動』において、現代の軽症化したうつ病の要因を、「近代的主体の変容」つまり「超越論的審級の衰弱」に求める。松浪克文氏は『「ディスチミア親和型」と『現代型うつ病』』で、ディスチミア親和型について症状論、診断学の両面にわたり実に精緻な吟味を行い、「ある種の脆弱性を有する若者が明確な社会化の要請に晒された際に起す心理的な反応が遷延している状態」と理解し、ディスチミア親和型の青年を精神科治療の対象とすることについての是非を論じる。そのほか、北中淳子女史による医療人類学からの論考「疲弊の身体と『仕事の科学』」、牛島定信氏による「現代のうつ病をどう考え、対応するか」、古茶大樹氏による「うつ病と退行期メランコリー」がある。

いずれの論考も力作で、各著者の独自の論点が明確に出され、うつ病について多角的に考える貴重な機会を与えてくれる。

(加藤 敏)